授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1951 号

The change of proteinuria and renal function for Type2 diabetic patients in standard treatment

（2 型糖尿病患者の標準的治療における蛋白尿および腎機能の変化）

小泉　学応（こいずみ　がくおう）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、一般病院外来に通院している 2 型糖尿病患者のアルブミン尿および腎機能に影響を及ぼす因子をロジスティック回帰分析により解析したものである。結果として、アルブミン尿および腎機能ともに影響を及ぼしていた因子は HbA1c 値の上昇、アルブミン尿の増加に影響した因子は収縮期血圧 130ｍmHg 以上であること、腎機能の増悪に影響した因子は RASI 服用の有無であった。HbA1c 値が上昇することによりアルブミン尿は増加し、腎機能には明らかな増悪が認められており、HbA1c 値が 7%を超えた場合 RASI 服用によるアルブミン尿減少効果や腎保護効果に有意な差が認められなくなった。また HbA1c 値が上昇していない症例（HbA1c7%未満）において、血圧上昇がアルブミン尿増加のリスクに、レニンアンギオテンシン系阻害薬（RASI）を内服していたことが腎機能の保護に繋がっている結果となった。

2 型糖尿病治療において、血糖コントロール・血圧コントロール・RASI 内服はいずれも重要な治療であり、ひとつとして欠かすことは望ましくないものであると考えられた。解析に用いた母集団の平均年齢は 66.9 歳、HbA1c7%未満の患者平均年齢は 69.2 歳と比較的高齢であるが、これまでの研究において、高齢の糖尿病患者における多因子強化療法は必ずしも有益というわけではないとされてきたが、今回の研究は、高齢の 2 型糖尿病患者においても低血糖のリスク管理や、血圧低下による循環不全に対するリスク管理を行ったうえで、多因子強化療法を行う必要があることを示唆した臨床的に意義ある論文である。よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。